2021 年度下野市伝統的建造物実測調査報告書

令和 4 年 3 月

小山工業高等専門学校建築学科
教授　安高尚毅

目次

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2. 実測調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2-1. 行政倉庫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2-2. 天満宮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2-3. 吉田八幡宮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

3. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

4. 別添写真行政倉庫・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

5. 別添図版行政倉庫 ・・・・・・・・・・・・・・・・・10

6. 別添写真天満宮 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

7. 別添図版天満宮 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

8. 別添写真吉田八幡宮 ・・・・・・・・・・・・・・・・35

9. 別添図版吉田八幡宮 ・・・・・・・・・・・・・・・・43

1. はじめに

近年、下野市では下野市歴史的風致維持向上計画が認定され、古くから受け継がれてきた文化財や歴史的景観を守り、未来へと継承し、豊かなまちづくりを進める動きが進展している。しかし、埋蔵文化財の調査に比べて、有形文化財の調査は必ずしも進んでおらず、有形文化財の中でも、特に建造物の指定件数は少ない。よって、文化財候補建造物の評価が必要で、本年度は、石橋町花の木にある行政倉庫、上吉田にある天満宮、本吉田にある吉田八幡宮の３建造物を対象として、その価値の所在を把握するために実測調査を実施した。上吉田の天満宮および吉田八幡宮は『南河内町史民俗編』[注1)]に町史編纂のための建築史的考察がされており、天満宮は配置図と本殿平面図が掲載され、建築的特徴が述べられている。ただ、明快な建築年代は捉えておらず、拝殿につても言及されていない。吉田八幡宮については、実測調査図面は掲載されず、建築的特徴と建築年代の考察が行われている。

よって、本実測調査はこれら建造物について文化財保存のための建築史学の立場から学術調査を行うことを目的として実施した。天満宮・吉田八幡宮についても改めてその価値の所在を把握するため実測調査を実施する。具体には、現状の配置図の採取、現状の平面図・立面図・断面図の採取と実測を行い、これらの図面を作成すること、写真撮影、来歴の聴聞、構造形式の採取を行い、価値の所在を把握することを目的としている。

本文の執筆は安高尚毅・羽石愛華が担当し、図版は羽石愛華・野田美樹が作成し、羽石愛華が調整を行い、編集は安高尚毅・羽石愛華が担当した。

2. 実測調査結果

2-1. 行政倉庫

行政倉庫は、栃木県下野市石橋町花の木3丁目8番21号に存する。

調査日は2021年9月25日で、調査員は小山工業高等専門学校建築学科・教授・安高尚毅、同・助教・小林基澄、同・専攻科２年・長田みつき、同・5年・羽石愛華、同・5年・青柳篤広、同・5年・野田美樹である。

もともとは農業協同組合の米蔵として使用されていたという。現在は下野市の倉庫として使用されており、行政倉庫と呼ばれている。

敷地は鉄柵と石垣により囲繞され、北・西・東の北側が道路に接し、西中央から敷地へと入る。北東に「こどもの広場いしばし」と称す児童館が配され、その南に行政倉庫が建つ。西側前面は駐車場が設けられている。昭和42年の航空写真[注2)]を見ると周辺環境は農地で、敷地形状に変化がないことが知られる。現在と比較すると、周辺環境は農地が減り、市街化していることが把握される。

建物は石造りで、一部RCと鉄骨を使用し、庇は木造とする。基礎と土間はコンクリート造である。壁は尺八石（900 × 300 × 240）と考えられる910 × 303 × 260mm[注3)]を測るツル目仕上げの大谷石（深岩石）を積み上げ、下部４段は厚みを325 mmと太くする。軒裏は白漆喰の鉢巻を廻す。石と漆喰の間にはコンクリートの臥梁が廻される。西側には水切りを付している。屋根は棟を南北に走らせた直屋の切妻桟瓦葺の５寸勾配で、庇は金属板葺とする。妻側中央と東側壁面２ケ所ににコンクリートの控え壁を設ける。

建物規模は桁行10間、梁行４間とし、西に２ケ所、入り口の庇を付ける。建物内部は中央で５間×４間の２室に分けられる。建具は取り換えられており、南の部屋は鉄骨を組み２階床が増設されている。各室の小屋には越屋根の痕跡がみられ、かつては越屋根があったと推定される。小屋組みは洋小屋のキングポストトラスとする。火打梁と振れ止めは転用材が使用される。建物容量として１部屋160俵の11段が収納でき、約44町分の水田の収穫を収めることが出来るようである。

全国的に農業協同組合の蔵は各地に見られ、標準設計[注4)]の存在が指摘されているが、本建築もその標準設計に則って設計されている。しかしながら、地元の大谷石（深岩石）を使用した倉庫で、景観的な特徴と固有性を有し、内観は洋小屋を見せ、近代期の特徴を有し、昭和42年以前には存在したことが明らかで、建築後50年を経過しており、登録文化財としての特質を備えており、歴史的景観を形成する存在として貴重な建造物であるといえる。

2-2. 天満宮

天満宮は、栃木県下野市上吉田363に存する。主祭神は菅原道真で、境内神社に八幡神社、大杉神社、疱瘡神社、弁財天がある。境内建物は本殿、幣殿、拝殿、鳥居一基を備える。由緒からは、弘安元年（1278）結城上野介広綱の族、吉田中務大輔が、京都の北野天満宮を勧請して建立し、結城家代々が崇敬したと伝えられている。今の社殿は寛永3年（1626）に徳川の旗下、島田・山下両家より造営されたと伝わる[注5)]。

調査日は2021年9月25日で、調査は現況平面図・現況断面図・現況立面図の採取及び実測、内観外観の写真撮影を実施した。調査員は小山工業高等専門学校建築学科・教授・安高尚毅、同・専攻科2年・長田みつき、同・5年・羽石愛華、同・5年・青柳篤広、同・5年・久納翔太、同・5年・永井志保、同・5年・野田美樹である。

天満宮境内は北側、東側、南側に道路が隣接し、社地は多数のスギの木が点在し、神社を囲っている。南側に木製の鳥居が置かれ、鳥居をくぐると参道が続く。参道中間の西側に倉庫が設けられ、石段を上がると、両側に4基の石灯篭を備える。社殿は参道正面に拝殿、幣殿、本殿が続き、南面して建つ。本殿は昭和34年建設の覆屋の中にある。境内各所には石の社が点在する。

拝殿は桁行3間・梁行2間の寄棟造平入の亜鉛鉄板葺、向拝は1間で、軒は一軒半繁垂木とする。切面取の方柱を建て、丸釘を用いて切目長押と内法長押で柱を固める。柱間には建具が入らず、外側に雨戸を立てる。鴨居と敷居に2本溝があるので、かつては引違い戸が入れられていたと考えられる。3方に切目縁を巡らし、正面に木階2級を設ける。向拝柱上部は獅子彫刻木鼻付きの出三斗を載せる。中備は無い。手挟を備える。虹梁・海老虹梁は渦と若葉が繋がり、渦の節々に玉をもつ。身舎の内部は拭板とし、竿縁天井を吊る。柱幅は118㎜×114㎜、柱間は内法で3460㎜、内法高は1764㎜、天井高は2601㎜で、柱はスギ材を用いる。

本殿は、木造切妻造りの柿葺の一間社流造りで、向拝を1間とする。妻飾りは二重虹梁太瓶束で、切妻破風に透かし彫りの懸魚が付く。軒は二軒繁垂木とする。切石の上に石造の亀腹をのせ、その上に円柱を建て、長押で固める。腰組には三手先を組み、その上部にこちらも円柱の身舎柱を建て、切目長押と内法長押で柱を固める。円柱上部は出組とし、中備を本蟇股とする。柱間装置は観音開き板戸2枚を立てる。4方に一枚板の縁を巡らし、組高欄、脇障子が付く。正面に木階5級と浜床・浜縁を設ける。向拝との間は海老虹梁でつなげる。そして、建物全体を彫刻で埋め尽くす。

向拝柱に梅の地紋彫風彫刻を彫り、上部は木鼻と中備が一体化した一部彩色をもつ二頭の龍、その上に出三斗を載せる。手挟は牡丹の籠彫りとする。軒廻りの組物の木鼻に獅子頭を施す。こちらにも一部彩色が見られる。胴羽目は大江山の鬼退治が三面に渡って彫られ、左面胴羽目の彫刻に多少の損傷が見られた。輿羽目には亀と波、縁下に波を施す。正面子脇板は錦鶏・梅、左面脇障子に雉と大和松、右面脇障子は懸巣・大和松を施す。懸魚は牡丹、身舎の正面蟇股は鶺鴒・唐松、背面と左面蟇股は浄瑠璃・大和松が彫られる。海老虹梁と身舎の大虹梁は渦と若葉が繋がり、渦の節々に玉をもつ。

天満宮神社本殿に棟札と記念牒札と木札が保存されている。

棟札の表に「奉再造天満宮社頭一宇　頴拝稽首　聖主天中天迦陵頻伽聲是法住法位大行叉　帝　釋　天　碑文師大聖文殊菩薩世間相常住　総戒師釋迦牟尼如来　哀愁衆生者我等今敬禮　我毟安穏　惣行叉普賢菩薩　天人常充満　證誠師　大　梵　天」

裏に「寛永勧請　享和元年類焼　文久三年十一月再建　導師木上山三十世　堅者法印不染虎廣貫　　大工棟梁　渡邉大和正　藤原正信　服棟梁　田口茂吉　別當本願寺真観　願主世話人　高橋興八　小口村司　鱒淵元策　小口禰右衛門　田上善右衛門　野口勘左衛門」の墨書きが記され、享和元年（1801）に類焼し、文久3年（1863）に再建されたことが知られる。また、大工棟梁は「渡邉大和正　藤原正信」と判明する。棟札には釘跡が残り、本殿に打ち付けられていたか拝殿に打ち付けられていたかは不明である。

さらに、拝殿には奉献額と奉納額、板札が保存され、奉献額に「明治三十九年正月廿五日」、奉納額に「大正拾壱年拾壱月」、「昭和四年九月二十七日」、板札に「平成六年十二月吉日」の墨書きが残され、額の中で最も古い奉納額が示す明治39年（1906）に拝殿が存在した可能性は高い。

また、撮影年代不明の古写真が残されており、現在の姿と同じ拝殿が写る。

本殿を囲う覆屋の大谷石の腰壁に碑文があり「奉納　大谷石　野口荘一　昭和三十四年　二月二十五日」と刻まれ、昭和34年（1959）年前には本殿が存在したことは明らかである。

また、『栃木県神社誌』[注6)]には、今の社殿は寛永３年３月に造営され、明治になり村社に列せられ、旧観を修理しつつ社殿を完備したとされる。

一方、『南河内町史民俗編』[注7)]にはこの説を否定し、江戸時代後期から末期の建築である旨が述べられる。

建築年代は、実測調査からは、『南河内町史民俗編』[注8)]が妥当であり、江戸時代後期から末期の建築と絞られ、棟札からは享和元年（1801）に類焼し、文久３年（1863）11月に再建したことが知られる。本棟札の信憑性については、覆屋の建築年代が昭和34年であること、拝殿に明治から昭和前期の奉納額が飾られること、拝殿・本殿とも虹梁絵様が18世紀末以降の様式を示し、本棟札は現建築のもので間違いない。よって、本殿と拝殿は文久３年に建立されたと結論づけられる。

また、本建築は本殿の建物全体を彫刻で埋め尽くしていることが一番の特徴である。この彫刻を誰が作製したのかも明らかとなれば、本建築の評価につながる。

細部に鳥類、胴羽目に大江山の鬼退治、下部に亀などの水系の装飾が施され、どの部分にも豪華な彫刻がはめられ、どれもダイナミックな彫刻である。この作風と本地方で活躍した彫物大工の系統を探すと栃木県南部で活躍した渡邉氏系統が浮かび上がる[注9)]。棟札には前述のように「渡邉大和正藤原正信」との記載が見られる。栃木住の彫物大工として渡辺正信が知られており、県内外各地で彫刻作品を残している。「渡邉大和正　藤原正信」は渡辺正信と見て良い。よって、天満宮は大工棟梁と彫物大工棟梁が同一であり、彫刻は栃木住の渡邉正信の作品として間違いない。

以上、建築年代が文久３年と明確なこと、本殿に豪華な彫刻を備えること、彫物大工が明確なことから、栃木県の近世社寺建築において、非常に価値の高い建造物であるといえる。ただし、緊急性は低いものの本殿垂木が外れている部分があり、小屋組や屋根の修理が必要であることを付け加えておく。

2-3. 吉田八幡宮

吉田八幡宮は、栃木県下野市本吉田971に存する。主祭神は誉田別命で、境内神社に愛宕神社、浅間神社、雷電神社、八坂神社がある。境内建物は本殿、拝殿、神楽殿、八坂神社、手水舎、社務所、鳥居二基を備える。由緒からは、文治４年（1188）11月に小山城主小山朝政が、鎌倉の鶴ケ岡八幡宮を勧請して建立したとされ、元亀２年（1570）当時結城城主だった晴朝が、当所に別館を建て、当八幡宮を守護神として社殿を改築し、その時に祭田も増加された。その後、徳川家光によりさらに四石の御朱印地が寄進され、明治40年に指定郷社となるとされる[注10)]。

調査日は2021年10月24日、11月７日で、調査員は小山工業高等専門学校建築学科・教授・安高尚毅、同・５年・羽石愛華、同･5年･青柳篤広、同･5年･久納翔太、同･5年・永井志保、同・５年・野田美樹、同・５年・白石千遥である。

吉田八幡宮は西側、南側に道路が隣接する。洪水でも水につからない地と伝わる。南側に大工棟梁高津泰次郎による昭和４年２月改造の大鳥居[注11)]が置かれ、東側に社務所が配される。参道中間に二基目の大正12年の鳥居[注12)]が置かれる。それをくぐると右側に石造りの手水舎、その先東側に大工棟梁高津泰一郎による昭和４年11月竣工の神楽殿[注13)]が配され、北側に鳥居を置く。参道正面左側には八坂神社、石段手前の両側に石灯篭を置く。石段を上がると両側に玉垣が配され、狛犬が置かれ、参道正面に拝殿、簡素な幣殿および本殿と続き社殿は南面して建つ。本殿は朱塗りの瑞垣で囲われる。幣殿はもともとは大谷石の敷石と階段で構成されていたと考えられ、現在のものは後の造作である[注14)]。

境内各所に末社が置かれ、拝殿南西から時計回りに、八坂神社、阿波大神・天満宮、琴平大神、富士朝間神社、日光三社大神、疱瘡神社、愛宕神社、秋葉神社、雷電神社、火防神社、稲荷神社が設けられる。社務所の手前には下野市の珍しい樹木５選であるケヤキが植えられる。

拝殿は桁行６間、梁行２間、正面に１間の向拝を設けた木造入母屋造り亜鉛葺平入

りの平屋で、正面に千鳥破風を飾る。この千鳥破風は明治24年の屋根の葺替えによるものという[注15)]。軒は向拝部分は二軒繁垂木とし、その他は一軒半繁垂木とする。千鳥破風の妻飾りは木連格子とし、入母屋部分は束のみである。切面取の方柱を建て、切目長押と内法長押で柱を固める。柱間装置は正面に角釘を用いた蔀戸を立て、側面は引違い板戸を立てる。外壁は真壁とし、3方に切目縁を巡らし、正面に木階3級を設ける。身舎は柱間上部に組物は無く、中備も無い。内部は床を畳敷とし、竿縁天井を吊る。

柱幅は、142㎜×144㎜で、柱間内法は2間で3645㎜、芯々で3820㎜である。長押断面は155㎜×21㎜、差物断面は352㎜×143㎜である。内法高は1823㎜、天井高は3091㎜である。柱の材種は、柱はスギ材、向拝柱はケヤキ材を用いる。

本殿は1間の向拝を設けた一間社流造りの木造切妻造り、屋根は銅板葺、妻飾りは虹梁太瓶束とし、切妻破風に蕪懸魚が付く。軒は二軒繋垂木とする。向拝柱とは海老虹梁でつなぐ。身舎は円柱を建て、切目長押と内法長押で柱を固める。柱上部は出組とし、軒支輪に浮き彫りを施し、中備を本蟇股とする。柱間装置は観音開き板戸2枚を立てる。4方に切目縁を巡らし、跳高欄、脇障子が付き、正面に木階5級および浜床・浜縁を設ける。向拝柱上部は出三斗を載せる。腰組は無く、大谷石を3段積み上げた基礎上に亀腹、縁束をもつ。虹梁は渦と若葉が繋がり、渦の節々に玉をもつ。本殿内部は天井を格天井とする。

聞き取り調査からは明治9年に本殿、拝殿ともに新築とされ、境内にある石碑からは明治9年に拝殿が改修され、大正13年に本殿が改修されたとされ、見解が異なる。さらに、『南河内町史民俗編』[注16)]では今回確認していない「請負証書」「金銭出納差引帳」の存在から社殿は明治9年の建築という見解が示されている。また、大工が宮田栄吉、木挽が添野善吉・稲毛多四郎が担当したことも記載される。

経年感や虹梁絵様から拝殿・本殿ともに明治9年の建築と判断した。拝殿は畳敷の桁行6間、梁行2間の長方形平面が特徴的で、本殿も質実な造りで、鎮守社としての境内は広く、その由緒も栃木県南部を象徴する歴史性を有した神社として、下野市の近代社寺を代表する建造物として貴重な存在である。

3. まとめ

以上より、下野市に残る伝統的建造物3件の実測調査報告を行った。いずれも歴史的価値を備える建造物であるといえ、登録文化財の候補となりえることを明らかとした。

注

注1: 南河内町史編さん委員会『南河内町史　民俗編』平成7年3月、南河内町
注2: 国土地理院蔵
注3: 誤差と目地による相違と考えられる。
注4: 農林省米穀局編纂『米穀倉庫の建築設計』昭和13年、社団法人日本米穀協会
注5: 石原重殷編『栃木県神社誌』昭和38年、栃木県神社庁
注6: 前掲注5
注7: 前掲注1
注8: 前掲注1
注9: 彫物大工分布図参照。羽石愛華「小山市・下野市における神社の彫刻装飾について」令和3年度小山工業高等専門学校卒業論文参照のこと。
注10: 前掲注5
注11: 棟札による。
注12: 鳥居に刻まれている。
注13: 棟札による。高津泰次郎と高津泰一郎は同一人物の可能性も考えられる。
注14: 現在も大谷石の階段が残存している。
注15: 前掲注1
注16: 前掲注1